

5 研究の視点

研究主題を深めるために、次の二つに視点を当て研究を進めることにした。

- (1) 言葉の力をつける。
- (2) 言葉の力を活用し、考えを伝え合う力を育てる。

(1) 言葉の力をつける

研究主題の『子どもたちが自ら考え表現する授業』を創造するためには、子どもたち一人一人に言葉の力が身につけていなければ、主体的で効率のある活動は期待できないと考える。言葉の力とは技能を含めた様々な読みの方法、書く方法、話す・聞く方法、また、すべての能力の基礎となる文字・語彙などにかかわる力と考えている。これらの力はその場限りのものではなく、子どもたちが時や場に応じて活用し、自ら考え判断し、表現する力として発揮することができるように取り組んでいきたい。

指導内容・方法の明確化

本校では、国語科における「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の3領域1言語事項における『基礎・基本』の力を確実に育成することと指導と評価の一体化を図るために、指導内容・方法を明確にした授業づくりをめざす。

そのために、次のような視点を意識しながら教材研究・評価活動を行う。

学習指導要領の内容を具体的に示す

ア 指導案における指導内容をはっきりさせる。

本単元ではどの領域のどの内容を指導するのかを明確にする。

イ 指導内容について具体化を図る。

指導要領の解説をもとに、2学年のまとまりで書かれている指導内容や言語事項について1学年ごとに系統を意識しながら、どのような場を設定し、子どもたちにどんな知識や技能をつけるのか、また指導上の留意点なども明確にする。

単元の指導内容をしぼった指導事例を示す

ア 国語科領域別指導内容案や国語科年間指導計画案を作成する。

本単元で指導する領域の年間の見通しや別単元との関連を明確にする。

イ 指導内容を効果的に指導するために扱う言語活動を示す。

指導内容の具体化を図るために、言語活動における具体的な子どもの姿を表す。

指導と評価の一体化を図る

ア 本単元における【国語への関心・意欲・態度】【領域別の能力】【言語についての知識・理解・技能】の評価規準を明確にする。

評価規準を指導する領域・内容に絞ることで、指導と評価の一体化を図り、どの授業でどのような子どもの姿をねらっているのかを明確にし評価することで、指導者の意識統一を図る。

イ 本時の授業の中で評価規準の具体化を図る。

本時の授業計画の中に『十分満足できる状況』『概ね満足できる状況』を子どもの姿で明記し、『概ね満足できる状況』『努力を要する状況』と判断される児童への手だても明確にする。さらに単元終了後、評価結果をまとめ、次単元の指導に生かす。

言語技術の習得

子どもたちが「聞く・話す」「書く」「読む」方法を学ぶとともに学習内容を正しく理解し、それを言葉で表現する経験を積み重ねていくために言語技術の習得を図る。子どもたちの発達段階に応じた言語技術を習得させるための教材の開発に取り組む。

「言語技術」とは

(1) 情報を主体的に獲得し、(2) 自分の考えを組み立て、(3) 分かりやすく発信するための「聞く」「読む」「話す」「書く」に関する技術(スキル)である。

(1) 情報を主体的に獲得するとは「考えながら聞く・読む」こと

(2) 自分の考えを組み立てるとは、「獲得した情報をもとに考えたり自分の意見をもったりする」こと

(3) 分かりやすく発信するとは、場面や目的に応じて「考えながら話す・書く」こと

言語技術の指導内容

受け答えをする技術...問答ゲーム

要点をまとめる技術...再話

構成を考える技術...物語の構造分析

様々な角度から物事をみる技術...視点を変える

情報を正しく伝える技術...描写・説明・報告

情報を的確に分析する技術...絵・テキストの分析

(広島県「ことばの教育による」)

(2) 言葉の力を活用し、考えを伝え合う力を育てる

子どもたちが、言葉の力を活用し、考えを伝え合う力を育てるために、子どもたち自らが話したくなる・考えたくなる場と子ども同士の考えがつながり、深まるような場を設定していかなければならないと考える。さらに、子どもたちが習得した言語技術を効果的に活用し、論理的に考えることができるような学習展開を行っていく。そのために、考えを伝え合うための学習材の仕掛け作りや考えがつながり、深まるような発問の工夫を行っていきたい。

話したくなる・考えたくなる場をつくるための学習材の仕掛け作り

子どもたちが「自ら考え表現し、ともに学び合う」という視点から学習材をみると、全ての情報が与えられている教材を使って内容を確認したり、イメージを発表したりするだけで、どの考えもよいという評価では子どもたちが考えを深める場は生まれないと考える。論理的に考え他者と関わるためには、学習材の仕掛けが必要となってくる。また、そのことが教材研究を深め明確にした指導内容を確実に学力として子どもたちにつけることになると思う。

考えがつながり、深まるような発問の工夫

「どんな感じですか?」「どんな気持ちですか?」「次にどんなことをしますか?」というような内容をなぞる、内容を確認するだけの発問では、自分の考えをさらに発展させることにはつながりにくいと思う。子どもたちが他者と関わりながら考えをつなぎ、深めていくために、自分の考えを支える根拠が明らかにできる発問の工夫をめざしたい。根拠を明らかにさせ、言語技術を活用した発表をさせることが表現力を育てることにもつながっていくと思う。